



研究概要

背景

- 気候変動や不安定な国際情勢は世界の食糧生産に影響を及ぼす一因となっています。
- 食料資源の多くを海外に依存する我が国にとって、依存率の高い作物の国内生産強化や、海外の生産地での技術移転や共同研究を通じた生産振興は食料供給の安定化と食の多様化に貢献します。

目的

- 日本国内でのキャッサバ栽培を目指し、生産量・品質向上と産地拡大に必要な栽培技術体系の確立を行います。
- 収穫残差を含むバイオマスのトータル利用のために炭化技術を利用した土壌改善方法を模索します。

主な成果

- 冬季の低温によって通年栽培できない我が国の状況に適応するキャッサバ栽培技術（苗保存、生育向上、適期収穫）を確立しました。
- キャッサバの塊根肥大に伴うアミロース/アミロペクチン比の季節変化を明らかにしました。
- 収穫残差の炭化物を利用することでヒマワリやヤトロファ栽培で使用する化学肥料の代替が可能であることを明らかとしました。

連携への展望

【地域農業との連携】

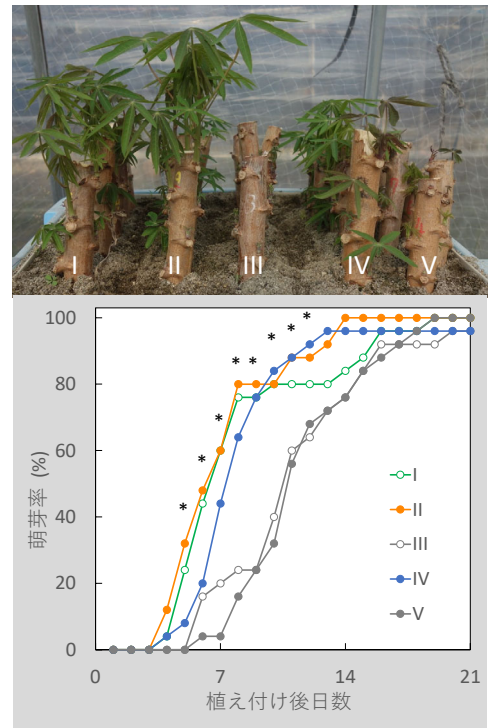
これまでに培ったキャッサバ栽培方法のより広範囲での活用を目指し、栽培と利用の可能性を広げます。

【科学コミュニケーション】

海外の生産現場で生じている問題に対し、現地と日本の双方で取り組み、課題解決と人的交流に貢献します。



多様なキャッサバの利用法



植え付け前処理によるキャッサバ苗の生育促進
 V(無処理)とIIIに比べ、II、IV(異なるpriming処理)の萌芽が早い。



アピールポイント

キャッサバを始めサトウキビ、NERICAイネ、カンショ、トウガラシ、ヤトロファ、パインアップルなど多彩な熱帯作物の利活用に貢献します。